



みんなで「縄文小屋」をつくろう 縄文時代の道具で 木材加工に挑戦



大小さまざまな復元石器



アドバイスを受けながら、木材の加工に挑戦する参加者

真脇遺跡縄文館は縄文時代の復元石器を使った「縄文小屋」づくりを開始しました。同遺跡では平成26年度の発掘調査で見つかった「ホソ付き部材」が発見されたほか、建物の木柱根など建物の痕跡が多数発掘さ

れています。

縄文小屋は平成29年の完成を目標としていて、3月12日には第一回のワークショップが開かれました。講座では復元建物の設計者の雨宮広さんが講演しました。雨宮さんは大工として技術を高めていきましたが、「機械による加工は人間の創造力を超えている」と感じていました。以来、石器と出会い、石斧（せきくわ）を使って、木と向き合いながら大工仕事を行っています。「家は、人が自然と共存して快適に暮らすためのもの」と話し、「生きる力と魅力にあふれた真脇の地から、技術を発信したい」と力を込めました。



復元小屋の模型の前に、石器の魅力語る雨宮さん

参加者65人は石斧を使った木の加工体験を行いました。木に逆らわないように斧を振り下ろし、木を切断したり、ホソ穴を開けたりして作業の難しさを体感し、縄文人の生活に思いをはせました。

鳳珠酒造組合がきき酒会

能登杜氏が醸した新酒

出来栄えを確認



鳳珠酒造組合のきき酒会が3月9日に国民宿舎能登やなぎだ荘であり、組合に所属する能登町、輪島市、珠洲市の11の酒蔵から56点が出品されました。審査は吟醸酒、純米酒、本醸酒、普通酒の各部門ごとに行われました。新酒の芳醇な香りが漂う中、白衣を身につけた審査員が真剣な表情で、味覚と嗅覚を研ぎ澄ませて審査にあたりました。金沢国税局の遠山亮鑑定官室長は、能登の酒について「味わいのしっかりした酒が多く、風土に合っています。味・香りのバランスが良く満足感のある酒です」と感想を話しました。

酒は酵母の働きで造られます。酒造り時期である昨年12月は、例年になく高温に見舞われました。遠山室長によると、能登杜氏は静岡県など温かい地方の酒蔵でも活躍しているため、暖冬に対するノウハウを持っているとのこと。今年の酒造りは厳しい条件で始まりましたが、能登杜氏が持つ高い技術で乗り越え、おいしい酒ができたようです。

